あゝ信州よ山の国　誇りは高しアルペンの
峯に輝く雪を以(も)て　希望(きぼう)は高しいや更(さら)に
さらば歌はむ諸共に　若き血潮のゆくまゝに
あした夕べの友は山　山は我等の姿なる
山は我等の姿なる

思誠寮々歌

第四チーム　小川勝追悼トレッキング隊

10月12日　ポカラへ向けて出発する第四チームの隊員

10月13日　ポカラ　プムディコットの日本山妙法寺の前で

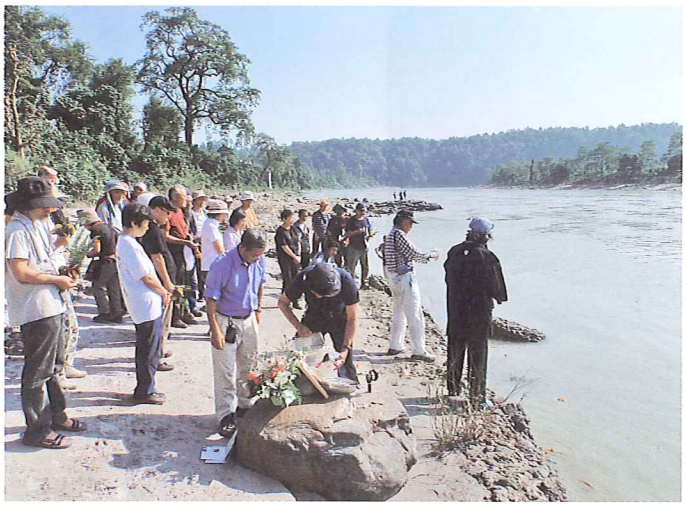
10月14日　追悼式はジュゲディの関根メモリアルガーデンの慰霊碑前で行われた

赤いブーゲンビリアの花に囲まれた祭壇の様子　　撮影　向後元彦

祭司は宇都宮觀龍
撮影　向後元彦

夫人　岩津よしゑさんの献花
撮影　向後元彦

宮﨑敏孝学士山岳会長の挨拶
撮影　向後元彦



ナラヤニ川へ参列者が様々な思いを込めて散骨した

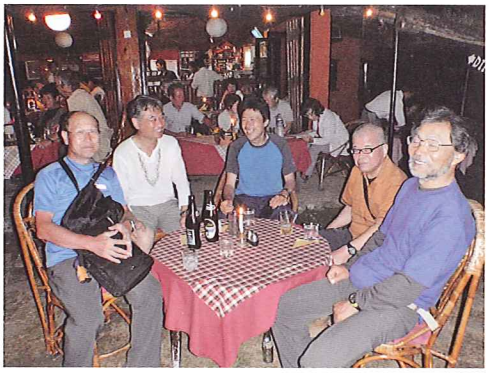
回向文を読む板谷真人隊員と宇都宮観龍　　撮影　向後元彦

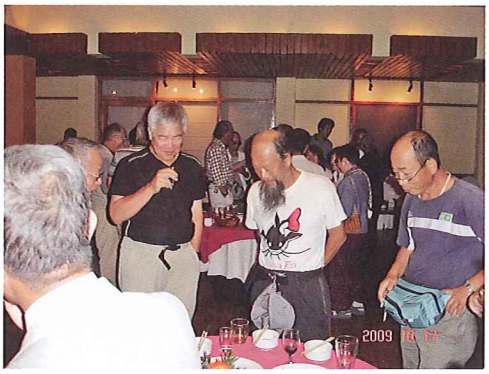
宇都宮観龍の尺八の演奏の下、散骨と献花をおこなった

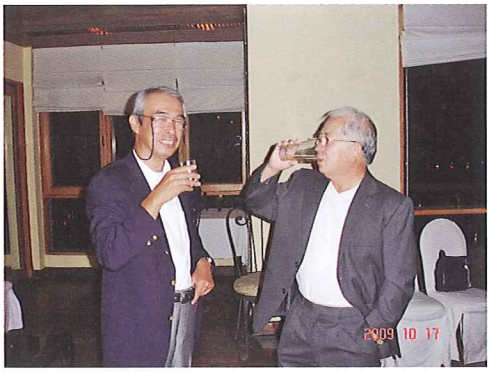
RESTAURANT

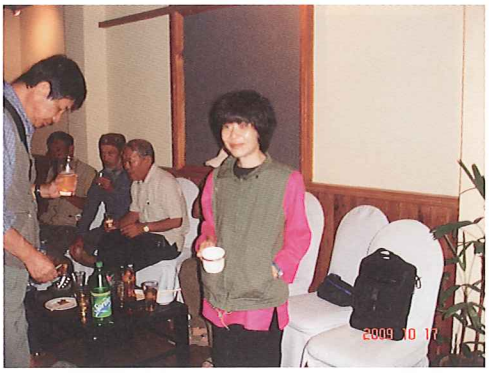
FRUIT
SHOP

ARTS CRAFTS




2009


2009 10 17



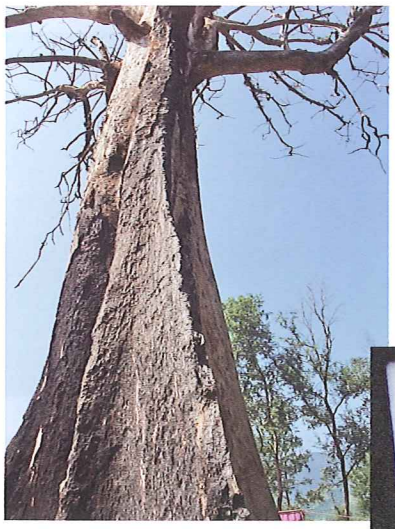
2009 10 12

9N-AIN

2009 10 16

NEW MINI VIDEO
SPEED

10月17日　カトマンズ郊外ゴダワリ・リゾートで記念撮影　皆さん本当にご苦労様でした



関根倫雄メモリアルガーデンのシンボルツリー
「シマッラ」と新しくなった銘板

行動総括

実行委員長　松尾　武久

第四チームは、これまでの学士山岳会の海外遠征に尽力してくれ、またこれから後輩たちの海外遠征のために山岳基金を残してくれた故小川勝さんの追悼を目的として編成されたチームであった。したがって、「学士山岳会」ばかりでなく「山哲会」をはじめとして「故小川勝さんと交流のあった方々」に声をかけた。

「山哲会」は信州大学理学部教授故山田哲雄先生を囲む会で、「地質学教室」「探検部」「山岳会」「思誠寮」の有志が集まっていた。山田哲雄先生が山岳会の顧問を長年やって頂いたこともあり、この会の発足・企画・運営に故小川勝さんは、故関根倫雄さん(1992年のカトマンズ郊外のタイ航空機事故で遭難）と一緒になって努力してきており、1994年には故関根倫雄さんの追悼式をナラヤニ川畔のジュゲディで執り行い、追悼トレッキングも企画して実行に移していた。

今回の追悼式を何処でやるかについてはいろいろな案が出てきたが、夫人の岩津よしゑさんの散骨をしたいとの希望をかなえるためには、高山や奥深い山々は避けて、交通の比較的便利なところで行うことが良いとの結論になった。

となると今までの経緯からジュゲディの「関根倫雄メモリアルガーデン」が最も相応しいということになった。すぐ近くにナラヤニ川が流れており、この川は中部ヒマラヤの山域、東からランタン山群、ガネッシュ山群、マナスル山群、アンアプルナ山群、ダウラギリ山群から流れてくる川が総て集結し、果てはガンジス河そしてインド洋に注いでいるからであった。

「山哲会」のメンバーにしても「関根倫雄メモリアルガーデン」がどのような状態になっているか、これをどのように維持していくのかといった問題があり、この地に多大な関心があった。向後利彦君の努力により現地調査をしてみると、長年の放置で木々がジャングル化しており、金属製のものは銘板から総て盗難に遭っていた。とても追悼式ができるような状態ではなかったが、株式会社日さくとその現地の方々の努力により、綺麗に整地をして頂き慰霊祭が行えたのであった。これについては心からお礼を申し上げます。

10月14日、ポカラから第二チーム2名、第三チーム16名、第四チーム31名計49名がバス2台で出発した。デュムレ、ムグリンを経由してトリスリ川

沿いを南下し、4時間ほどかけてジュゲディに到着した。14時ころからテライの太陽が輝く下、厳粛な雰囲気のなか慰霊祭を執り行い、その後参列者全員で故小川勝さんの遺骨をナラヤニ川の流れに託し、彼の愛したガネッシュ山群、ランタン山群の雪となって再び戻ってくることを祈った。悠久の流れに漂う赤や黄色の花々が参列者全員の胸の中にそれぞれの思いを深く刻み込んでくれたのではないだろうか。

主要目的の追悼式が終わった後は、2番目の目的であった「チトワン国立公園」でジャングルサファリを経験しようということを計画していた。参加者も大いに楽しみにしていたが、ネパール政府とサファリ業者とのトラブルで現地に入ることができなくなり、結局取りやめとなってしまったことは誠に残念であった。

このことにより急な日程変更を余儀なくされた。大人数の旅程変更はホテルとかレストラン等インフラが未整備なネパールでは受け入れる余地が無いため、参加者の皆さんに多大な迷惑をかけることになってしまった。

コスモトレック社や旅行業者も懸命に努力してくれたが、数々のトラブルを生んでしまったことは、実行委員長としても誠に申し訳なく思っている。反省としては、ポカラでどのように変更するかもう少し慎重に検討すればよかったと思っている。

もう一日バラトプルでゆっくりして休養し、象遊びとか出来れば落ち着いた旅行になったのかなとも思い、またカトマンズでは、経験者が多かったので小グループでの行動に切り替えて、自由行動時間を多くとった方が良かったのではなかったか。各自に任せたほうが食事やショッピングにより楽しめたのではないかとと反省は尽きない。

いろいろなことがあったが、10月17日の打ち上げパーティーで、参加者全員で「雲にうそぶく」「嗚呼、青春」「春寂寥」等の寮歌や「ネパールソング」を肩を組んで歌えたとき、今回の参加者の皆さんの60周年事業に対するご理解と心からのご協力に対し熱い涙が流れて止まらなかった。

学士山岳会の皆様、山哲会の皆様、小川勝さんゆかりの皆様、そして総ての関係者の皆様、本当に有難うございました。

行動概要

副隊長　井関　芳郎

第四チーム行程

10月11日

日本発　カトマンズ着（泊）

チェックイン後、富士国際旅行社の中野隆夫氏より、行程の変更の可能性のあることを告げられる。ネパール政府とチトワン国立公園内にあるホテルの経営者（国有地を借地している）間の交渉がまとまらず、国立公園内に立ち入ることができなであろうとのことであった。

成田空港出発　香港空港到着

香港空港待合室にて名古屋、大阪組と合流。

カトマンズ国際空港着

ガンジョン・ホテル着（泊）

10月12日

カトマンズ発　ポカラ着

ポカラ市内観光、博物館見学

第二・三チーム帰着　合同ミーティングを行う

夕食は第二・三・四チーム合同でレイクサイドの中華料理店(チャイニーズ・ガーデン・レストラン）にて夕食

ポカラ、ホテル・ベースキャンプ・リゾート泊

10月13日

ポカラ滞在

妙法山ストゥパ、ペワタル・ポカリへハイキング。

第二・三・四チーム合同で、ネパール・レストランにてネパーリ・ダンスを見ながら夕食

ホテル・ベースキャンプ・リゾート泊

10月14日

ポカラ発　チトワン着

ジュゲディ、関根メモリアルガーデンで追悼式

夕刻、第一チーム登頂成功の報入る

ホテルのホールに全員集い、夕食（大宴会）

小川勝さんの霊に献杯　山田典子さん

第一チームの登頂を祝して乾杯　小原武さん

チトワン、サファリ・ナラヤニ・ホテル泊

10月15日

チトワン発　カトマンズ着

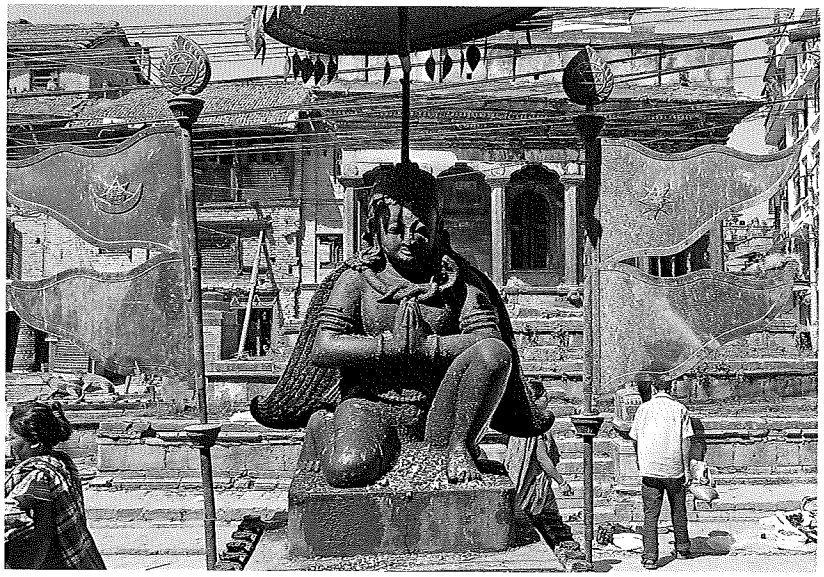
チトワン国立公園でのジャングル・サファリが中止となったため、急遽カトマンズ南郊のリゾートホテルへ向かう

3班に分かれてバラトプル空港よりカトマンズに向かう。

ホテル・シャングリラにて昼食、その後カトマンズ市内観光

カトマンズ南郊のゴダワリ・ヴィレッジ・リゾート泊

10月16日
カトマンズ滞在
ナガルコットの丘へエベレスト展望ハイキング
ナショナル・ボタニカル・ガーデン（植物園）散策
夕食はカトマンズ市内のロイヤル・ハナ・ガーデンにて日本食に舌鼓をうつ
ゴダワリ・ヴィレッジ・リゾート泊
10月17日
カトマンズ滞在
午前中、パタン観光
ガンジュン・ホテル着、昼食
夜　ホテル・シャングリラにて大津夫妻、バッタチャン氏、ロヒト氏を招待してさよならパーティーを開催
ギャンジョンホテル泊
10月18日
カトマンズ発　日本へ帰国
終日自由行動
夕食はホテル・マナスルにてチベッタン料理
カトマンズ国際空港発
10月19日
香港到着・解散式後　成田、中部、関空に分かれ日本着



パタン市街の仏像

小川勝氏追悼慰霊祭

井関　芳郎

平成21年10月14日、ネパール連邦民主共和国のジュゲディにある関根メモリアルガーデンにて約60名が参加して挙行されました。

失なわれたため再製作された関根倫雄氏を追悼する銘板と新たに山田哲雄先生や小川勝氏等6名の山哲会の早くして逝った仲間の名前を刻んだプレートをはめ込んだ慰霊碑が日さくネパールの職員の協力を得て復旧されました。

日本から持参した花やポカラで集められた花で飾られた祭壇には遺影や菓子、お酒、ワイン等供えられました。

34℃を越す猛暑の下でしたが、松尾総隊長（実行委員長）の挨拶と今日の追悼慰霊祭に至る経緯の説明、宇都宮觀龍さんの般若心経の読経の後、尺八を奏でるなか祭壇に祭られた遺影に献花しました。

ついで宮﨑学士山岳会長及び菅家山哲会長（代読難波良平さん）の慰霊の辞を捧げ、慰霊祭を終了しました。

場所をナラヤニ川畔に移し、小川勝氏の散骨式を執り行いました。

全員で般若心経を唱え、宇都宮觀龍さんが尺八を奏でるなか、岩津よしゑさんを先頭に一人づつ、ナラヤニ川に花とともに散骨しました。そして思誠寮OBの杉本則夫さんの音頭で、花びらが漂うナラヤニ川に向かって、小川勝さんの大好きだった「ひょっこりひょうたん島」を全員で合唱しました。

再び慰霊祭の会場に戻り、日本から持参したお供えの酒「七笑」をコップに注ぎ、西郡さんの発声で小川さんはじめ早く逝った仲間たちの霊に献杯しました。

その後円陣を組んで「春寂寥」を合唱し、最後に小川勝さんの奥様岩津さんの挨拶で追悼慰霊祭を終わりました。

追悼者の氏名（敬称略）を以下に記します。

山田哲雄、小川勝、岩本尹也、伊藤国啓、加藤一作、柳沢進、山形文武、佐藤正敏、片岡格、福島渉、二俣勇司、服部崇、小滝顕也、御子柴三男、関根倫雄、甲谷宏、小林敏男

その夜はホテルのホールに全員集合し、故人を偲んでの大宴会となりました。山田典子さんの音頭で小川勝さんの霊に献杯し、そして本日第1チーム登頂成功の報が伝えられたため、小原武さんの音頭で成功を祝して乾杯しました。また、小川さんがネパールへ初めて来た年、1967年製のスコッチ・ウィスキーを岩津さんが小川さんの遺

影に供えた後、皆でおこぼれを頂戴しました。本日は飲み放題としましたので夜の更けるまで宴は続きました。

本席の飲代は吉沢範子氏、渡邉せつ子氏、矢野コトエ氏、小林常男氏、遠藤昭二氏から御供養として頂戴した御芳志をあてさせていただきましたこと心より御礼申し上げます。

最後に今回の慰霊祭を催行するにあたり、現地の事前調査、会場の整備、慰霊碑の復旧、慰霊祭の準備においては株式会社日さく海外事業部の辻本徹文氏、現地法人の日さくネパールのディレクター、ロヒト・プラサド・ゴウタム氏はじめ職員の皆様には一方ならぬお世話になりました。ここに改めて深く感謝し御礼申し上げます。

銘盤の再製作に際しては、原板を製作された志津雅美氏には拓本を元に石に掘り込むことを快く承諾していただきました。また製作に当っては秋山石材有限会社の秋山十三男氏、またこの両氏との間を取り持っていただき、秋山氏を紹介していただいた菅原孝之氏に紙上をおかりして御礼申し上げます。

供養回向文

仰ぎ冀くば三宝附して照鑑を垂れ給え。今日慰霊祭に当り、虔んで香華燈燭茶菓浄饌を備え、以て供養を伸ぶ。恭しく般若心経を諷誦す。集むる所の功徳は、秀峰院彩雲日勝居士俗名　小川勝　霊位を供養し奉る、あわせて請い願わくば信州大学山岳会の輩　顧問としてご指導賜った山田哲雄･穂高岳に逝きし岩本尹也　伊藤国啓　加藤一作･剱岳に逝きし柳沢進　山形文武･アンナプルナⅡ峰に逝きし佐藤正敏･富士山に逝きし片岡格・グランドジュラスに逝きし福島渉　クラウン峰に逝きし二俣勇司・中央アルプス檜尾尾根に逝きし服部崇　小滝顕也　アイサワ谷に逝きし御子柴三男・また山哲会の輩　関根倫雄　甲谷宏　小林敏男の各精霊の為に報地を荘厳し奉る。伏して願わくは、生　死の流に処して驪珠独り滄海に輝き、涅槃の岸に踞して桂輪孤り碧天に朗かに、普く世間を導きて同じく覚路に登らんことを。

慰霊の言葉

山哲会　会長　菅家　延征

小川勝さんの慰霊祭に当たり、「山哲会」の仲間を代表し、謹んで追悼の言葉を申し述べます。まず最初に、健康上の理由もあり、私が、この場に参加出来なかった事を、お詫びします。お許し下さい。

小川さん――。いま私は、一枚の写真を前に、この原稿を書いています。1994年10月8日、この「関根メモリアルガーデン」の慰霊碑をバックに、小川さん、奥様の岩津よしゑさん、山田哲雄先生夫人の典子さん、関根倫雄君夫人の恵子さん…達と、一緒に撮った写真です。

あれは、ゴサインクンドの岩壁に墜落したタイ航空機事故で亡くなった関根君の追悼事業の一環で、小川さんが追悼トレッキングの委員長を勤め、ここで慰霊祭を実現した時の写真です。小川さんは、関根君が「山哲会」を立ち上げて以来のメンバーですが、追悼トレッキングを率いた時の、企画力・実行力・統率力に、仲間一同、改めて舌を巻いたものです。

しかし、小川さん、この同じ場所で、小川さん自身の慰霊祭が開かれるとは、いったい誰が想像したでしょう。まだまだ、元気で、我々を指導して欲しかった。「山哲会」の仲間もみんな、そう思っています。

昨年の秋、乗鞍で開いた山岳会と合同の追悼会で、私は「山哲会は、人脈の交差点です」と申しました。輪の中心には山田先生――。それに旧探検会、山岳会、思誠寮、地質学教室、信大以外の人々…。組織の垣根を超えて、思い思いに人が集まり、飲み、かつ語り、明日へのエネルギーを充電してきました。

山田先生が亡くなったとき、「関根メモリアル・ガーデン」で慰霊祭をしたい、という声はあったのですが、かないませんでした。今回、山田先生はもちろん、山岳会以外の小林敏男、甲谷宏、両君も含めて慰霊を出来たことは、山岳会のお陰です。これも、小川さんの功徳でしょう。小川さんは、人と人とを繋ぐ、名人です。

ところで、この「関根メモリアルガーデン」は、当時、ネパールで仕事をしていた向後利彦君の尽力で実現しました。荒れていた慰霊碑も修理し、今後は「山哲会」が維持管理に当たることになります。新しい銘板には、山田先生、小川さんらの名前を刻み、そこには、思誠寮寮歌「春寂寥」の最後の句、「あわれ床し　友どちが　あかぬ　まどひの　もの語り」を書き込みました。

この地は、「山哲会」の新しい『聖地』になったと言っていいでしょう。小川さん、それに山田先生、関根君、佐藤君、御子柴君、小林君、甲谷君。「あかぬ　まどひの　もの語り」を楽しんで下さい。いずれ、我々も加わりますから…。

2009年10月14日

1992年、カトマンズ郊外のタイ航空機事故で遭難した故関根倫雄さんの追悼碑も新しくなった

ネパールでの散骨を終えて

岩津よしゑ

2009年10月、信州大学創立60周年記念事業に組みこんで頂き、ネパールでの散骨を終えることができました。お世話になりました皆様、ご参加頂きました多くの方々へ心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

あるお酒の席での事、「ネパールで散骨したいと考えている」と未だ何も具体的な事は決めていない時期にふと漏らした一言を松尾さんが温めて下さり、当初からは思ってもみない様な大勢の方とご一緒に散骨ができました。信州大学で山岳部に在籍した7年間、そして卒業後も学士山岳会の一員としての活動を通じて折りに触れ、山との関わりを持ち続けた小川勝にとり、山とつながる方々に供養して頂く事ができ、こんな有難いことはないと家族として思っています。

10月14日（水）信州大学創立60周年記念事業の中に加えて頂いて51名もの方に参加を頂きました。ポカラから慰霊祭を行うジュゲディまでバスで4時間ほどでした。

1992年、タイ航空機事故でネパールで遭難された関根倫雄さんを追悼する為に建設された関根メモリアルガーデンにて、追悼式と山でなくなられた方々の慰霊祭を行う。仙台の宇都宮さんが般若心経と尺八で追善供養をして頂きました。

その慰霊祭の場はジャングルと化していたのを、日さくネパールのロヒトさんをはじめネパールの方々の協力をえて藪刈り整地の上シートを敷きいす席の用意までして頂いての事でした。ネパール現地との調整や準備は、ネパールでの仕事が長い向後利彦さんのお力添えなくしては実現できない事であったと思っています。

会場へは、穂高の井関さんが信州で準備して背負ってきた石板、山田哲雄先生の関根さんを追悼する碑が再建され、関根恵子さんはリハビリ中の身でありながら、お花を日本から用意し持ち込んで下さり、ポカラのホテルの庭で事情を話して枝を切らせてもらったブーゲンビリヤと共に飾りつけがされました。

50余名もの方に供養して頂いた後河畔へ降り、ナラヤニ川へお一人ずつ散骨して頂いて式を終えました。ナラヤニ川は下流でガンジス河に合流する、ネパールの3大河川のひとつ、たっぷりの水を湛え岸付近はゆったりとした流れであるが、河の中程はかなり速い流れのよう。ヒマラヤの氷河や雪解け水を集めて大きな流れに合流し

国境を越えてインドのガンジス河へ注ぐという。その地に散骨する事ができ、小川にふさわしいと思えました。

散骨の写真を向後元彦さんに撮って頂ました。ポカラホテル屋上からの山々の写真と共にありがとうございました。

小川にとって1967年は初めてネパールへ踏査に来た記念すべき年であり、その後の彼の人生に大きな影響があった小川にとって1967年は特別な意味がある年でした。

ある時1967年製のスコッチを見つけ、いつか大切な人達と飲むつもりで穂高の山荘に置いていました。小川の想いの1本を、今回をおいて封を切る機会はないと思い持参しました。夜の食事会では、それで献杯していただきました。

翌10月15日（木）バラトプルから17人乗りの飛行機に分乗してカトマンズへ。

低空を飛ぶ機上からは、アンナプルナ山群をくっきり見る事ができ、まるでマウンテンフライトさながらの眺めを楽しむ事ができました。直ぐ傍の席に岡山の渡部さんがみえて、山々の説明を聞く事ができました。小川にとって憧れの山パビール峰も鮮やかに見る事ができ、ひときわうれしい事でした。

サファリが中止となり、カトマンズ南方郊外にあるゴダワリへ移動しました。標高1,500m高台の斜面に建つ広いホテル。庭からは、ランタン山群が望め、1994年ランタン谷トレッキングで歩いた所です。ランタンリルン、ガネッシュ、パビール峰が見えました。

ゴダワリの近郊に植物園があり山田典子さん、関根恵子さんと一緒に、ロヒトさんも案内で来て下さりご一緒しました。寺田雅治さん、井関さん、宇都宮さんとも公園内で一緒になりました。山の近くにある植物園は山との境が分らない位隣接して造られていて、ここでゆっくりと散歩をし、寺田さんと歩き、一緒に写真を撮ったりしたのが最後になろうとは思いもよりませんでした。寺田さんのご家族とはある時期、毎正月休みに乗鞍高原の岡崎さんの所でご一緒した事を思い出します。寺田さんご一家、大阪の扇能さん夫妻、そして私達でスキーを楽しみました。時に伊那の平さんが加わる年もあったと思います。

寺田雅治さんのご冥福をお祈り申し上げます。

10月18日（日）帰路出発の準備を終え、ホテルから空港へ。空港への送迎メンバーに1994年トレッキングの時にお世話になったシェルパ頭　サーダー・ギャルツェンの姿がありビックリしました。コスモトレックで仕事をしているとの事でした。ギャルツェンは小川の事を覚えていました。思いも

かけずギャルツェンに会った事でもう一人ネパールといえば思い出す人、バラールさんにご挨拶できなかった事が悔やまれます。事前に何の準備も気がつかずでした。

信州大学初登攀の報せがバラールさんにも届いていた事と思います。年末に達筆な字でOgawasan、Okusanと書かれたカードを頂きました。小川の訃報を遅ればせながら伝える事となりました。

ネパールツアーに参加でき、小川勝が信州大学山岳会での経験がその後の人生に大きな影響を及ぼすような密度のある、他には代え難い経験をした事を少し感じる事ができました。特に第3隊の皆さん信州大学山岳会の黄金期ともいえる時期に学生生活を過された方々の底力を感じました。平均年齢64-65歳位でしょうか、高所を含む28日間にも及ぶトレッキングを一人の落伍者も出さずに歩き通され実行された事、これは凄いことだと思います。1年前からの雪上訓練に始まり一人ひとりが体力維持向上に勤め、目的の為に力を出しての快挙だと思いました。

この度たくさんの方にお世話になりました。

今回の企画を発案し、実行委員長として長きに渡り準備から始まり隊長として第3隊を率い最後までお世話になった松尾さんをはじめとし、ネパールとの交渉、準備をして頂きました向後利彦さん、追悼式、散骨の写真を撮って頂いた向後元彦さん、お経と尺八で供養をして頂いた宇都宮さん、仕事の合間をぬって、追悼式だけはと来て頂いた米倉さん、お一人ずつ名前を挙げられない方々、そしてネパールの皆さん、

ありがとうございました。

そして今回の壮大な計画のご成功に対し心よりおめでとうございます。

ヒマラヤエーデルワイス

心をこめて

山田　典子

今回の信大60周年事業への参加では、お世話になった小川勝さんの散骨式に参加する事が出来て本当によかったと思っております。

尺八の音にのって流れていく小川さんの霊を皆さんと一緒に見守ることができました。

ありがとうございました。

亡き人々への想い——第4チームに参加して——

西郡　光昭

実行委員会のメンバーや参加された多くの方々に支えられて、何とかネパール慰霊の旅（第4チーム）を了えることできました。時期的にもモンスーン後の好天に恵まれてポカラ中心の観光と、その後のテライでの慰霊祭を終えて無事帰国することができました。関係者皆さんのご配慮に感謝申し上げます。

私は10年ほど前から腰痛に悩まされ続け、好きな酒を飲みながら山の話をしたり、山の本を読むとき以外は登山もスキーもまるで他人ごとのような身体で過ごしておりました。しかし、今回の計画だけは何としても参加しなければと心に決めておりました。

多くの方が感じたでしょうが、それは信大60周年の区切りにこのような事業が計画されたこと、第4チームのプランがその一つとして組み込まれたからでした。そして何よりもこの事業全体が、故小川勝君の遺志の実現がその目的だったからでありました。

これもご存知の向きが多いと思いますが、小川君は山登りにどっぷり漬かって学生時代を了えただけではなく、現役時代から卒業後はますます幅広く多数の人達と交流を深めて生きた人でした。その一つが山田哲雄先生を囲む山哲会だったと思います。山哲会の代貸だった関根君がネパールのゴザインクンドで飛行機事故のため亡くなったときの落胆の様子はそれを物語るものでした。

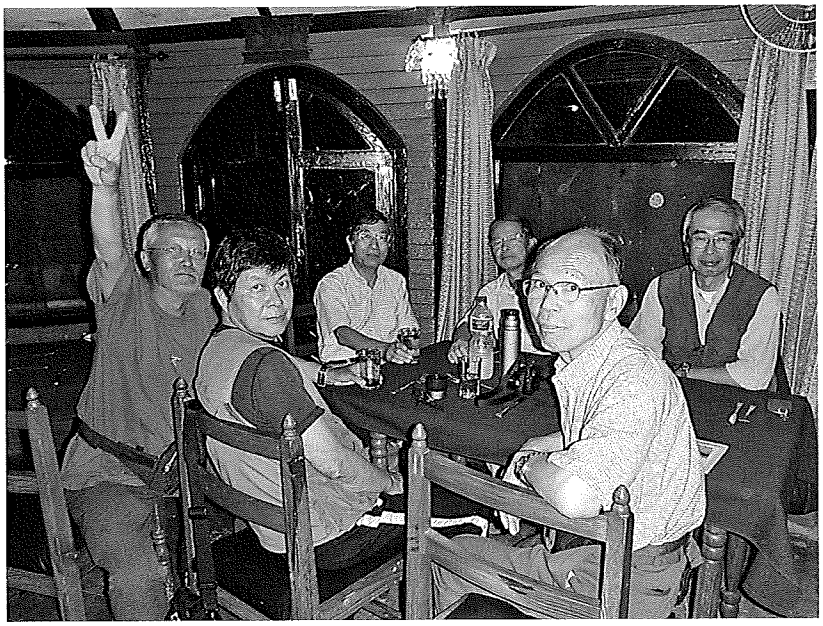
また、愛知万博の計画が進むにつれて持ち上がった環境破壊の問題を取り上げたグループの活動、これはむしろ岩津よしゑさんに触発されたというのが正解でしょうが、その活動をとおしてできた仲間たち。

さらに小川君や、今回の実行委員長で若いころ名古屋で悪事を働いた松尾君らの呼びかけで出来た山仲間。この人たちへ第4チームへの参加を呼びかけることに信大山岳会主催だからという理由で異議をとなえるものなどないどころか、慰霊の旅だが折角だから皆でネパールを楽しんできましょう、ということであの大集団になったのだと思っています。

第4チームのスケジュールや行動の詳細については他の誰かに執筆をお願いします。

上に述べたように小川君といろいろなつながりのあった皆さん、そして―私より年長で亡くなった先輩の皆さん他の若くして亡くなった古い仲間達に思いをいたし、彼らとゆかり深い方々と10日間ご一緒したことを思い返し、感謝の念を込め、改めて亡き人達の冥福をお祈りいたします。先の報告会には都合で参加できませんでしたが、またお会いする機会あればと願っております。

最後に、同じフライトで帰国の当日急逝された旧き岳友寺田雅治君の冥福を皆さん共々お祈りしたいと存じます。



ポカラの夜は更けても語らいは続く

ネパール追悼式

向後　利彦

予定通り、ネパールより10月19日無事帰国しました。

ネパールでは出発時、雨季の終わりが今年は遅いと、現地のロヒトから知らされておったのですが、我々が到着した10月11日には雨季も終わり、最後まで天候に恵まれました。

現地の行事としては10月12日、ポカラに出発する前の早朝に、日さく・カトマンズのロヒトにホテルに来てもらい、追悼式の準備の打ち合わせ。

10月12・13日はポカラで過ごし、アンナプルナやマチャプチャレの眺望を満喫しました。

10月14日、ポカラを早朝に出発、バラトプルのジュゲディに車で移動。午後1時より4時まで追悼式を行いました。式場はロヒトたちにいろいろ準備してもらい、式は順調に進み終えることができました。ここに何枚かの写真を添付しており、追悼式の報告を簡単にさせていただきます。

10月15日・16日はチトワン国立公園でジャングル・サファリの予定でしたが、チトワンでは公園内のホテル・オーナーと政府の間で、公園内の土地の使用料をめぐりトラブルがあり、結局政府側が公園を封鎖してしまいました。我々の予定はキャンセルとなり、カトマンズに戻って周辺のナガルコットなどにハイキングをして、2日間を消化せざるをえませんでした。

15日朝、カトマンズへの出発まで時間があったので、バラトプルで1992-3年のプロジェクト・サイトを訪問して現地のエンジニアに歓迎されました。施設は貯水タンクと屋上の滅菌装置、送水ポンプ、それに400tの高架タンクなど非常に良い状態で維持・管理されていました。

10月17日、カトマンズでロヒトに案内されて、バッタチャンの事務所で久しぶりに彼と会うことができました。その時、関根メモリアル・ガーデンの維持のため、今後引き続き、土地のオーナーとしての協力を依頼して、快く了解してもらいました。また、同日夜のツアー解散式のパーティにはロヒト、バッタチャンにも出席してもらいました。

10月18日には早朝マウンテン・フライトを楽しみ、残念ながら8,000mを超えたシシャパンマ、チョーオユー、エベレスト、ローツエそして、マカルーの頂上が雲で覆われ、全体を見ることができなかったのですが、7,000m級のガネシュ、ランタン、ガウリサンカール、メンルンツェ、ギャ

チュンカンはすっかり見ることができました。また、エベレストの手前のアマダブラムもはっきり識別できました。

そして、カトマンズの市内観光などをして、深夜にはカトマンズをドラゴン・エアーにて出発しました。

全体として事故もトラブルもなく、最後まで仲間たちと楽しく過ごすことができました。そして、一緒に行った妻にも満足してもらいました。

マウンテンフライトでヒマラヤを楽しむ

ネパール土産について
――モハンダイのロキシーとヒマラヤの地図――

渡部　光則

生まれて初めて訪れた異国の街、とりわけ長い間憧れ続けてきた街であれば、その記憶は薄れることなく、いつまでも新鮮に思い起こせる。私にとって、カトマンズとはそういう街であり、現役4年生の1973年夏の終わり、ネパールヒマラヤをめざして同期の高橋雄治君と二人で旅立った。バンコクで一泊後、乗り継いだ飛行機は悪天で中継地のカルカッタに引き返し、タイ航空（TG）の負担で豪華なオベロイグランドホテルに一泊。羽田を出て三日目の午後、カトマンズのトリヴバン空港に降り立った。1971年アンナプルナⅡ峰遠征隊が利用し、当時の装備品の一部がデポしてあった、故インドラマン・セルチャン氏経営のホテル・ラリグラスへ向かったが、空港からは現在と違ってディリバザールの人混みの中の狭い道を縫って走るタクシーの車窓から見た街並みの様子、これから一体何が自分を待ちかまえているんだろうと、えらくわくわくしたことがつい昨日のように思い起こせる。1970年春、信大に入学するため故郷広島を離れ松本駅に降り立ち、雪の常念岳を仰ぎ見たとき、親元を離れいよいよ新しい生活が始まるんだと期待に胸ふるわせた思いと似ていた。

あれから、1977年1月アンナプルナⅡ峰に逝った故佐藤正敏さんの七回忌、'80年3月ガネッシュヒマールⅢ峰遠征、'93年12月故小川さんと二人で合同登山の相手側との交渉、'96年9月ラトナチュリ峰遠征と度々この街を訪れた。最初に訪れた'73年当時のカトマンズの旧市街は未だ「それこそantiquityとtranquillityとの詩情だけがあった。」（深田久弥著「雲の上の道」から）という面影が充分残っていた。今回は13年ぶりの訪問であった。思えば最初の訪問から36年もの歳月が流れている。その間に田舎から都会へ多くの人の流入と車両の増加で、もともと都市のインフラ整備が充分でなかっただけに、電力、上下水道、ゴミ処理といった対策が追いつかず、ゴミと騒音と大気汚染の街に変貌した。それでもなお、私にとって第二の故郷と思えるのは懐かしい友が住み、盆地の周りの丘に登れば懐かしいヒマラヤの山々に再会できるからであろう。

帰国の日、遠征隊が宿舎とした旧友モハン・シン・トラチャンの宿を訪ね、旧交をあたためた。宿を辞するとき、彼は故郷ツクチェ産のロキシーを

土産に贈ってくれた。ツァンパの原料の麦から作られた度数が50度以上の非常に強い酒で、街中の登山道具店で求めた金属製の水筒に移し替えて、大事に持ち帰った。その折りに、モハンダイに登山隊長の田辺君宛のネパール測量局発行5万分の1地形図の購入依頼の手紙を託した。遠征隊帰国後、田辺君からお願いした5万分の1地形図が送られてきた。フィンランド政府協力の多色刷りの美しい地形図である。日本の国土地理院発行の5万分の1地形図のコンターは20m毎であるが、さすが標高差のあるヒマラヤ、40mである。氷河の様子も詳しく、アイスフォールやアプレーションバレーまで詳しく読みとれる。かっての遠征ではこのような詳細な地形図は入手できず、25万分の1の地図を頼りに計画を練った。この地図は大阪の地形図研究グループ作成の青焼きのカムカルテであり、稜線部の接続などに一部誤りがあったが、入手できる最良の資料であった。

モハンダイにもらったロキシーをちびちび飲みながら、新しい5万分の1のヒマラヤの地形図を眺めていると、次々と新しい夢が湧いてくる。'96年のラトナチュリ峰遠征の帰路、もう充分だな、終わったなと、何か憑き物が落ちたようにさばさばした気持ちになり、キャラバンを終えカトマンズへのバスの車窓からの過ぎゆく景色を沁みるように眺めたことを覚えている。今再び、新たなヒマラヤへの思いが出てきたことをうれしく思う。夢はいくつなっても持っていたほうがいい。短期間であったが、思いを新たにする楽しい旅であった。ご一緒させていただいた皆様に深く感謝します。

末筆ながら、ご帰宅前に突然ご逝去された寺田先輩のご冥福をお祈りします。

二回目のネパール

板東　昭

二度目のネパール行きが学士山岳会の六十周年記念の一環としての故小川さんの追悼慰霊祭になるとは思いもよりませんでした。

この年は丁度私が還暦を迎えた区切りの年で、当初、娘もこの企画に参加したいというので申込みましたが仕事の都合でダメになり私一人の参加となりました。しかし、第四チームの面々は殆んど顔見知りで楽しい旅が出来ました。同室者は難波さんで、飲んべぇの私のために日本から酒のつまみを大量に持参してくれたお陰で、つまみに事欠くことなく一杯やって旅行中大いに盛り上がりました。

追悼慰霊祭が行われた関根メモリアルガーデンは十五年振りの再訪でした。時の流れは重く、象徴であったシマッラの大木は落雷のためか焼け焦げ枯れて無残な姿でした。また、入口の扉とレンガ塀等金目のものはすべて持ち去られていましたが、モニュメントだけは銅製の銘板を除いて無事でした。井関さんが銅板の替わりに手配持参した大理石の銘板（山田先生・小川さん等故人）を嵌め込んで式は開始され、宇都宮さんが奏する尺八の簫条とした音色のなかで、献花が始まりその後散骨。あの暑さのなかで奏続けた宇都宮さんには感嘆の言葉しかありません。

二番目の目的は前回できなかったアンナプルナⅡ峰を望むことでした。早朝ポカラのホテルの屋上からアンナのⅡ峰を遠望して長年の宿題から解放された気分になりました。

帰国前日、カトマンズ郊外のナガルコットから眺めた時にひときわ目立ったランタンリルンは、ヒマラヤ通のナベさんによると大阪市大が三度目の挑戦で初登頂したとのこと。この話を聞いて、信大にとってのそれはアンナプルナⅡ峰との感を深くしました。

学士山岳会として、アンナプルナⅡ峰に再挑戦してはと思うのは私だけでしょうか。

漂いつづけるひょうたん島

杉本　則夫

「波を　チャプ　チャプ　チャプ　チャプ　かきわけて…」ひょうたん島が漂流を始めたのは、1964年。僕は中学2年だったが、伊豆の山の中で多士済々愉快なひょうたん島の住人たちが繰り広げる冒険物語はとても楽しみな娯楽であった。

1970年、松高校舎で受験し高校の先輩の紹介で思誠寮に入ることとなった。大学紛争の後で先輩達は多くを語らなかったが、1年生の僕達は否すくなくとも僕にとっては、信州の山や食べ物、寮の生活ひとつひとつが物めずらしく新鮮であり毎日がキラキラしていたのを今も覚えている。寮では多くを語らない先輩の佐藤さんは、その年の瀬に穂高岳で書いたパイオニア・スピリッツの熱い文を文集編集の係であった僕にアンナプルナⅡ峰に向かう前の2月原稿を渡してくれた。

ニューギニア探険から帰ってきた関根さん達の話しや写真にとても好奇心を抱いたのも寮の生活での忘れがたい大切な一こまである。

1994年、関根さんの慰霊の旅に参加した。慰霊碑を除幕し、傍らの大きなシマッラの木も元気だったし臼井君と一緒に植樹し、また来ようと思った。関根さんの好きだったランタン谷へのトレッキングは、ヘリでカトマンズからゴサインクンドを越えリルンを望みながら谷のゴラ・タベラに舞い降り、ランタン村を経てキャンジュン・ゴンパまでの3日間、美しい緑の谷と青い空に屹立する白い峰を存分に味わうことができた。この旅をプロデュースしてくれた小川さんに乗鞍でまたネパールに行きたいと話したことがある。…

今回の小川さん追悼の旅では、静かな保養地のポカラに初めて行き、アンナプルナ山群をはじめネパールの高峰群を見ることができたことは僕にとりひとつの大きな収穫だった。

しかも、心に染みいる旅となったのは、バラトプルの関根メモリアルガーデンでの山岳会や山哲会の諸兄諸氏の追悼慰霊祭、寂静と響く虚無僧の奏でる尺八の音の中、小川さんの遺骨を皆でガンジスに連なる川に送ることができたことだ。

やはり、「ひょうたん島」は、松本、乗鞍の信州にもネパールにも健在で今も漂っているのである。そして、いろいろな人が島にいて、いろいろな人が島にまた流れ着き事が始まり、遠く果てしなく皆で漂いながら流れていく。

第四チーム井関グループの我らも、

毎夜酒を飲み交わし、ヤクのチーズを味わい、楽しい時を過ごすことができた。また、渡部君のネパール語をはじめとするネパール学の講義のおかげで僕も買い物が上手く？　なったし、亜熱帯の気候や風土にも興味を持ち、タメルの本屋で地図帳（アトラス）まで手に入れてしまった。カトマンズは、15年前はもう少しきれいだったような気がしたが…。しかし、チトワン国立公園に近い南部の農村はとても小綺麗で、そこで屈託のない笑顔をした子どもたちに出会うことができた。

今回、第三チームの面々は、アンナプルナ山群の一周トレッキングをやり遂げ充実した気持が溢れていた。次は、一周とは行かなくてもアンナプルナの白い峰に是非近づきたいと思う。

きっと何かが待っているだろう…

信大山岳会の輝き、22年ぶりのネパールで感じたことども

向後　元彦

久しぶりのネパールだった。初めて訪れたのは渡航自由化まえの1962年、半世紀ちかくまえになる。バルン氷河からカンチェンジュンガ氷河を一人で歩いた。それからカトマンズとインド東北部ですごし、翌63年にはトゥインズ（7,350m）登山隊に参加した。次が67年のガネッシュ・ヒマール山麓。かみさんの紀代美や仲間たちとともに、満開のシャクナゲやプリムラの花々を楽しんだ。3回目が77年、紀代美と幼い娘2人が一緒だった（どちらもいま40歳代になっている）。そして今回、4回目の訪問になる。22年ぶりの訪問だ。

ネパールにはさまざまな想いがある。が、ここでは、信州大学山岳会創立60周年の記念事業に参加した感想に絞り、そのいくつかを述べてみたい。

まず驚いたのは総勢66名という参加者の多さである。わたしが属する東京農大探検部も創立50年になるが、とてもこのまねはできない。ヒマラヤにたいする信大の衰えない意欲に感動した。

4つのパーティーのうち、第一チームは本格的登山だった。信大山岳会のエース田辺治をリーダーに8名からなる登山隊である。目的のひとつとしたヒムジュン（7,092m）からヒムルン・ヒマール（7,126m）の縦走は果たせなかったものの、同山群のネムジュン（7,139m）西壁の初登攀、そしてヒムルンヒマールの新ルートからの登頂をはたした。信大山岳会の若さに脱帽。

第二チームはアンナプルナ2峰の北に位置するマナンヒマールをめざした。数座の6,000m峰を視野にいれていたが、登頂できたのはピサンピーク（6,091m）。とはいえメンバー6名中5名が還暦をすぎていることを思えば「えらい」と云わざるをえない。

第三チームはアンナプルナ山群一周トレッキング。220kmを16日かけてあるく。これも19名のメンバーの多くが還暦を過ぎた年配者だった。

それら3つのチームは“あるく・のぼる”だけでなく、学術調査の側面もくわえていた。つまり大学付属の山岳科学総合研究所と協力して、高所医学と氷河・水系の水質・水の循環機構の調査をおこなっている。成果を期待したい。

紀代美とぼくの参加したのが最後の第四チーム、33名という大部隊だった。髪の薄さや白さをみると、これもまた大半が“還暦過ぎ”とみうけられた。

このチームには“小川勝追悼”という冠がついていた。じつは信大山岳会に属していないぼくが参加した理由のひとつが小川勝との関係である。蛇足ながら、小川について少しだけ紹介しておきたい。彼は、いうなれば、信大のヒマラヤ遠征の草分け。67～68年、半年間におよぶネパール・ワンダリングをした（メンバーは5名）。それが契機となって、信大はネパールに以後10回の登山隊を派遣することになる。記憶に薄いが、そのむかし、ぼくが小川たちにネパール行のアドヴァイスをしたらしい。親しくなったのは、それから10年後のこと。ヒマラヤとは縁のない沙漠の国クウェイトで、だった。小川はこの国で貿易をやろうとやってきた（全体は旧ソ連・北欧をふくめて1年半の旅だった、という）。そこには信大山岳会の顔ぶれが大勢いた。クウェイトでは地質調査会社を経営する市野文明とぼくの弟の利彦、となりのサウジアラビア・カフジにはアラビア石油に勤務する秋元一浩・元子夫妻である。いっぽうぼくは、ミリオネアになる夢をもって、同国でマングローブ植林をやろうとしていた(『緑の冒険』岩波新書、参照)。

オイルマネーが湧くクウェイトだった。しかし、その恩恵にはあずかれない。思い通りにことが進まず、ふたりとも失意の連続であった。いま想えば懐かしさもある。だが、あんな経験は二度としたくない。

残念ながら小川は64歳という若さでこの世を去った。道半ばで亡くなったかれの遺言を聞いて驚いた。多額の遺産を信大山岳会に寄付するというものだった。その一部が今回の7,000m峰をめざした若い隊員への経費補助にもなっているという。よけいなことだが、さほど金持ちでもなかった小川の意志とともに、それを実施にうつした夫人岩津よしゑさんの小川への愛情の深さに感銘をうけた。

追悼式はポカラの南、ジャナクプルのナラヤニ川畔“関根メモリアルガーデン”でおこなわれた。関根倫雄は都立武蔵高校山岳部のぼくの後輩、信大探検部の設立者でもある。92年、中央ネパールのゴサインクンドに激突したタイ航空機事故の犠牲となった。

メモリアルガーデンは信大関係者の「共同墓地」にもなっていた。山田哲雄信大教授（伊那谷出身、京大探検部創立者のひとり本多勝一の仲間だった）はじめとする何人もの人たちの名前が刻まれていた。そして、そのすぐちかくが、ぼくとともに農大探検部を設立した渡辺紘雄の終焉の地でもあったのだ。かれは66年12月、この川で行方をたった。25歳の若さだった。

信大OBの吹く尺八の音色と読経の声を聞きながら、ぼくは先に逝った仲間たちのことを想っていた。カナダ北極圏の凍てつく海で、東海大学探検部

の若者たちとともに行方を断った宮木靖雅（AACK）—かれとの出会いもネパールだった、ナミビア沙漠の自動車事故で死んだ国岡宜行（農大探検部設立の仲間）と山内孝治（農大探検部OB）。アラビアで親しかった秋元一浩（信大山岳会）……。

70歳になったぼくも、何回か死を寸前にしたことがある。北穂高での滑落。カンチェンジュンガ氷河ではクレバスにおちた。ブレンナー峠でのスリップ事故（冬、ひとりでロンドン・テヘランを走行した）。ホーチミン空港では離陸寸前のボーイング737がパンク事故をおこす……。そういえば、悪性の肝炎やデング熱にもかかった。あのときも、やばかった。

むかし話はこのへんでやめておこう。過去は過去、これからなにをするのか、それが大切だ。つい先ほど訪れたエジプトの砂漠を想いだす。草木ひとつない砂漠だった。だがそこは、9600万年前、体長30mの恐竜が闊歩したテチス海の浜辺だった。近くには足の痕跡をのこした原始クジラの化石が300体も発見されたワディ・ヒタンがある。そこには4000万年前のマングローブの地下部（根系）の化石がどこまでも続いていた。

目をあげる。遠くにアンナプルナ山群がかすんでいた。このヒマラヤもまた、5000万年前、インドとユーラシアが衝突し（テチス海が消滅して）、その結果形成されたものなのだ。ヒマラヤ・テチス海・沙漠・マングローブ。それらがひとつの線上にならぶ。

エジプトでは多くの古生物学者・生態学者と親しくなった。かれらと協力して「古生物学の冒険」ができそうだ。それは、ぼくの人生では“ヒマラヤ・南極最高峰・マングローブ林再生”についで4番目の冒険になるだろう。いまは亡き仲間たちとの会話しながら、つぎなる冒険への期待がいっぱいの自分が嬉しかった。

第四チームに同行して

株式会社　富士国際旅行社　中野　隆夫

ヒマラヤ・トレッキングを取扱う旅行社として、信州大学学士山岳会の60周年記念事業のお手伝いを微力ながらも担当させて頂きました。心からお礼申し上げます。

一方、期待された肝心のチトワン国立公園への入場が出来なかった事、運行管理にも不行き届きがたくさんあった事など、合わせてお詫び申し上げます。

2008年秋以来、松尾隊長との再三の打合せを含め、企画、調査、現地交渉、手配そして実施まで、10ヶ月以上に及ぶ作業でした。登頂計画、トレッキング計画、追悼式計画など異なる日程や目的のグループを融合させ、全体としてまとまりを持たせる企画に腐心しました。

第三チームには、前半の高度順応日程に配慮し、第二チームとの遭遇を願ってピサンBC往復を加え、ジョムソムからゴラパニを回ってアンナプルナ山域を一周し第四チームとタイミング良く合流する計画を練りました。

第四チームは慰霊祭を中心に据え、幅広い参加者のご希望に沿うべく訪問ルートを設定、チトワン国立公園探訪を加えてトレッキングとは一味違う想い出作りの計画が出来上がりました。

しかし、ネパールのインフラでは困難が伴う多人数での宿泊、食事、移動などたくさんの課題がありました。慰霊祭の場であるジュゲディのジャングル化対応、ポカラからジュゲディへの移動中の50名の昼食をどうするか等々…。

さらに苦労したのは国際線の予約確保でした。成田・名古屋・関空と発着地が分かれ、出発・帰国日が異なり、加えて多人数の組み合わせ、さらには追加参加、キャンセル、早帰りに居残り希望と日程も多岐にわたりました。折からの不況に影響された航空会社の運行も流動的で、予想以上の難しい交渉が続きました。一部名古屋出発のご希望が関空に変更になるというご迷惑をお掛けしましたが、8月下旬にようやく全座席確保が出来ました。

9月22日、第三チームを送り出した後、10月11日に第四チームの出発日を迎え、香港での合流も無事に終えて、一路カトマンズに向かうことができました。

本来、このような多人数参加者の場合の添乗員は複数人数とすべきところですが、山岳会を中心とした統率のとれたグループであり、リーダー役の皆様が運行をサポートするということで

私一人の添乗となりました。しかし、実際の運行においては情報が皆様に伝わりにくいという問題も生じご迷惑をお掛けしてしまいました。

後半からは隊長の音頭によりチームリーダーとの協調システムも機能し、何とか乗り越えられました。冷や汗をかきましたのが正直のところです。

ジュゲディの慰霊祭では、私の山仲間たちも山に逝っていますので、その思いを重ねつつ祈りました。私にとってはかけがえの無い想い出となりました。

残念なことに肝心のチトワン国立公園訪問は、現地ホテルとネパール政府の地代に関わる揉め事からチトワンのロックアウトという最悪の事態に巻き込まれてしまいました。

何でもありのネパールで、大抵のことには驚かない経験は積んできたつもりですが、この度は大人数という事もあって、現地コスモ社と共に対応に苦慮しました。

チトワンからカトマンズへの飛行機の再手配、カトマンズ周辺の新たな宿泊の選定、食事をどうするか、その間の行動は？と課題は山積でした。しかし、コスモ社の尽力もあり、皆様のご理解も得て宿泊はカトマンズ南のゴダワリ・リゾートに変更、植物園とナガルコットの小旅行で代替することになりました。

私どもの及ばぬ事由による変更とはいえ、期待をもって参加された皆様に大きな失望とを与え、慌しい運行管理となってしまいました。今もってお詫びと反省しきりです。

シャングリラ・ホテルでの記念パーティーもとても盛り上がりました。日本から持参したお蕎麦はお楽しみ頂けたでしょうか。ガイドも皆様と一緒にスクラム組んで歌っていました。楽しい風景でした。

最後に、学士山岳会の皆様から感じたこと

- チームワークが良く結束が固い（老若男女、家族、友人、逝った人みんな）
- 山岳会にしては歌が上手い（山岳会にしてはは余計か？）
- お酒をたくさん飲む（回数も、量も、スピードも）

宮﨑会長、松尾隊長はじめ皆様の絶大なご協力を得ながらひとつひとつの困難を乗り越えて無事に日本へ戻ってくることが出来ました。

第一チーム、第二チームも成果をあげられ、60周年事業がめでたく終了されました事を改めてお慶び申し上げます。

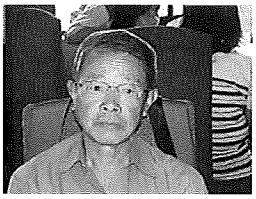
末筆ながら、ご自宅を前に逝去された寺田さまのご冥福を祈りつつ。

合掌

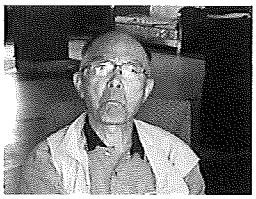
第四チーム　隊員紹介

学士山岳会関係者

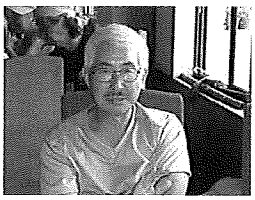
隊長　宮崎敏孝



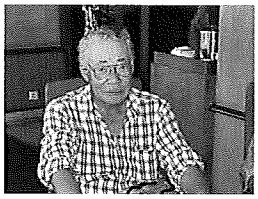
西郡光昭



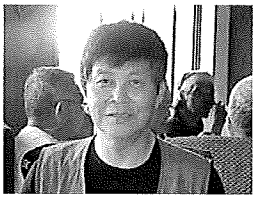
向後俊彦



今関貞夫



金子鉄男



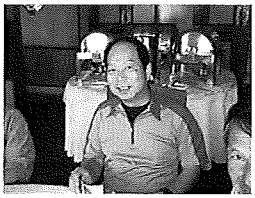
米倉幸夫

井関芳郎

笠原敬一

渡部光則

菊池宮人



岩津よしゑ

宮崎小里

佐藤敦子

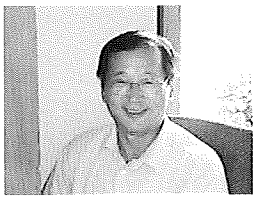
向後博子

山哲会関係者

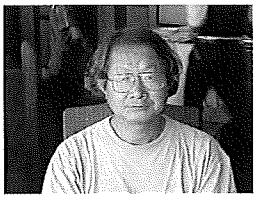
山田典子

関根恵子

川上正夫



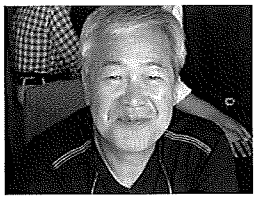
小林正明



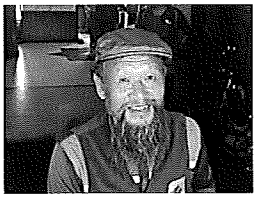
板東　昭

杉本則夫

難波良平



若島邦夫



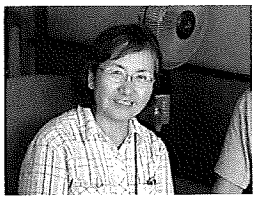
若島美代

その他関係者

長谷川和男

向後元彦

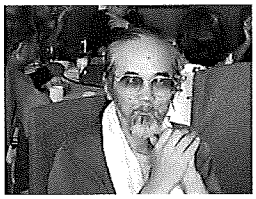
向後紀代美



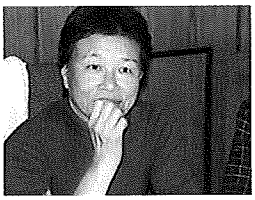
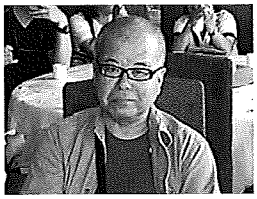
馬場健治

馬場温子

佐藤利和



佐藤ニナ



八坂浩睦